

(10) 前掲 Publications List. British Newspapers 1800-1900. British Library.

(11) 拙稿「幕長戦争期におけるイギリス新聞の分析―イギリス国内の認識を視点として―」『大島商船高等専門学校校紀要』第四五号、二〇一二年十二月。

(大島商船高等専門学校講師／山口県史編さん専門委員)

## 《史料紹介》

### 吉田兼右が写した大内系図

#### はじめに

系図は重要な史料だが、戦国期で滅亡した武士の系図には近世になってから書き加えられたり偽造されたりしたものも含まれ、再検討を要するものが多い。一六世紀に滅んだ大内氏の系図はいくつかあるが、すべて滅亡してから書かれたものである。最近の研究では、大内氏の系図に全く記されていない有力な人物も存在したことが確認されており、現存する大内系図もまた必ずしも正確・十全なものとはいえないのが明らかである<sup>①</sup>。

既存の大内系図の情報を補うためにここで紹介したいのは、大内氏滅亡以前に吉田兼右が記した略系図である<sup>②</sup>。これは、天理図書館の吉田文庫所蔵のもので、神道書の「神宝諸事根元行事壇図」のなかに含まれているもので

#### トーマス コンラン

ある。この「神宝諸事根元行事壇図」は雑記で、いろいろな兼右の自筆史料が混ざっている史料であり、その後には、天文十二年（一五四三）八月以降の兼右の日記が続いている<sup>③</sup>。兼右は、天文十二年に山口へ下向して同年八月から翌年七月まで滞在しており、この略系図が記されたのも、この時期のことである可能性が高い。略系図に大内義隆は「従三位」と書かれるが、その時期は天文十年（一五四一）十二月から天文十四年（一五四五）一月の間であり、これも兼右が下向した時期と符合している。

兼右が大内氏の系図を書いた理由については、よく分からない。しかし、「神宝諸事根元行事壇図」のなかに、兼右が記した「築山社祭礼次第」が含まれている点は注目される。築山社というまでもなく大内教弘が築山大

明神として祀られる神社で、大内氏にとっては重要な儀式の場である。その点を考えると、兼右が大内歴代を祀る祭祀に彼が何らかのかたちで関与したため、大内氏歴代の名を知ることが必要となった、とみなすこともできるのかもしれない。

この一連の史料のうち、日記の部分のみは活字化されているのだが、略系図を含むそれ以外の部分は基本的に未翻刻である。そこでここでは、以下に翻刻を示したうえで、興味深いと思われる点についていくつか指摘を加え、紹介することとしたい。

一 史料紹介

大内元祖八百済国ノ聖明王第二御子琳聖太子也、推古天皇廿年聖徳太子四十歳（推古天皇）、来朝奉祈精正身觀音之処、渡日本奉見聖徳太子之旨有靈驗、依之来朝云、琳聖太子ハ地藏之化現也、

琳聖太子 正恒（号長門） 藤根 宗範 茂村 保盛 弘真  
 良長 貞成 成房 弘盛 満盛（此代ヨリ大内介ト号） 弘成  
 盛繩 （弘力） 口貞 弘家 重弘（号集福） 弘幸（号永興） 弘世（号勇）  
 義弘（号青嶺） 盛見（号回出） 持盛（号徳吉） 持世（号徳清）  
 教祐（号保壽） 教弘（号徳吉） 政弘（号法友） 義興（号徳安）  
 義隆（号大式） 義隆（号大式）

二 史料の解説

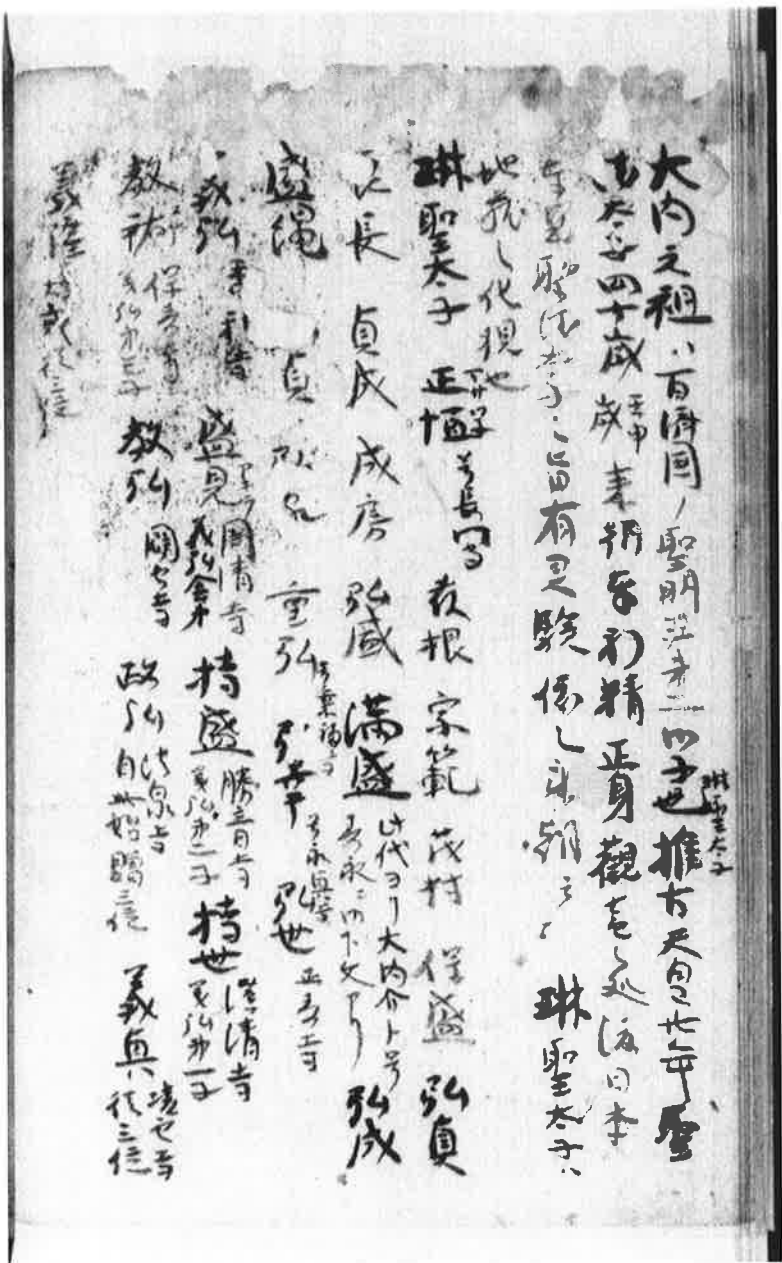
「盛見」の読み方

私は大内氏の研究を進めていくうち、大内盛見に対してさまざまな呼び名がされていることに気づいた。一般的には彼の名は「モリミ」と読まれているようだが、その一方で、「陰徳太平記」では「モリハル」とフリガナがうたれており、川副博氏・米原正義氏・松岡久氏もこの名前の読みを「モリハル」としている。しかし「モリミ」か「モリハル」のどちらが正しいかという点、どちらも確証を欠くと言わざるをえない。英語で表記するため、ローマ字で「盛見」の呼び名を表現しなければならぬ私にとって、こういう問題はたいへん悩ましいものである。

ところがこの系図には、兼右が「盛見」の「見」の横に「アキラ」とフリガナをうっている。この系図に記されているのが一六世紀の情報であることを考えると、少なくともこれまでの説よりは信憑性のある読みと判断し、よいように思う。

琳聖太子は地藏菩薩の「化身」

本史料の冒頭に記されている大内氏の先祖観一すなわち、大内氏の先祖は百済から来朝した琳聖太子である、



吉田兼右が写した大内系図（天理大学附属天理図書館蔵）

という説は非常によく知られているものである。しかし、その次に書かれている、琳聖太子は地藏菩薩の「化現」であった、という説はこれまで知られていなかったものである。

大内氏と地藏信仰との関係についてすぐに思い至るのは、天文十九年（一五五〇）に大内義隆が願主として造像した万福寺の「黒地藏」である。万福寺ではこの黒地藏について、琳聖太子が百濟より持参して以来、大内家に代々崇敬されたとも伝えている。琳聖太子がこの地藏像を持参したというのと、太子自身が地藏の化身であったというのでは内容は異なるのだが、どちらにしても大内家の信仰が根強く表現されていると思われる。そのあたりについて、検討の余地があるように思われる。

#### 平安時代の 大内氏の相続について

この略系図は大内氏の歴代を記しているようだ。ところが、他の系図では歴代に数えられていない人物が含まれている。たとえば、一四人目に現れる大内盛綱（盛綱）という人物。

この盛綱は、毛利家文庫の大内系図でも「大内十三代に加」と記されており、大内氏家督として認識されていたと考えられる。しかし、この系図では一四代としており、さらに検討する必要がある。また、毛利家文庫の大

内系図ではこの盛綱（盛綱）は右田氏の先祖としても数えられている。この二つをみても盛綱の位置づけは、謎に包まれていると言わざるをえない。

#### 一五世紀前半の兄弟家督相続傾向

最後の注目すべき点は、一五世紀前半の大内氏の新たな家督相続の流れが確認できたことである。

今までの通説では一四〇〇年から一四五〇年の大内氏歴代は、大内義弘、盛見、持世、教弘の四人であった。しかし、この略系図では、その時期の家督は義弘、盛見、持盛、持世、教祐、教弘の六人である。

大内持盛は一時的な家督であったことが昔から考えられていた。彼の立派な座像は、今でも山口の洞春寺に残っており、この座像は持盛が家督であったことを示す重要な証拠の一つと言える。さらに毛利家文庫の大内系図では、持盛は永享五年（一四三三）四月二十八日に豊前で戦死したが、『看聞御記』では永享五年四月二十日に切腹したと記されている。

そして持盛の没後、義弘の長男、持世が家督を受け継いだ。持世が家督だったことはよく知られていて、嘉吉元年（一四四一）足利義教が暗殺された事件に彼が巻き込まれて死亡している。毛利家文庫の大内系図で彼は、「嘉吉元年或二年七月二十八日」に亡くなったとされて

いるが、『建内記』には嘉吉元年七月二十八日に亡くなったと記されている。

兼右の系図だけに家督としてみいだせるのが、持世の後に記される大内教祐である。教祐について、貞享二年（一六八五）に写した文明十八年（一四八六）の大内系図には、筑前宗像西郷で討ち死にしたと書いているのみで、その戦いがいつだったかは明記されていない。大内教祐が筑前で戦死したから兼右の略系図に載せているとも考えられるが、筑前で戦死した大内満弘や明徳の乱で戦死した弘正は載っていない。さらに、長州や豊前で誅せられた弘茂や教幸も兼右の略系図には載っていない。大内教祐以外の戦死した人物は、家督でなければ兼右の略系図には載っていないのである。

このように教祐が他の戦死した大内一族の人々と違って、大内氏の家督の相続者として、將軍足利義教に認められた。その事実は、『満濟准后日記』の永享四年（一四三二）六月三日に明らかである。その記録によると、「大内修理大夫持世弟盛蔵主相国寺僧也、依舍兄申状被還俗、今日実名教祐、太刀一腰被下遣之了、山名申沙汰之也」。

ところで、四年後の永享八年（一四三六）、教祐が西郷で戦死したことは『醍醐寺文書』でわかる。彼は当時、

大敗を喫したらしく、大内氏に従った門司親忠や麻生家春、家慶と「親類被官人」も「筑前宗像西郷大内教祐一所打死」した。大内教祐は家督として活躍しなかったのに、歴代の相続者として認めたことによって、兼右の系図に載せられた。今まで全く注目されていなかった教祐は、大内氏にとって重要な人物であった。

#### 註

- (1) 和田秀作「大内武治及びその関係史料」〔山口県文書館研究紀要〕30号・二〇〇三年。
- (2) 最近、須田牧子氏が指摘した文明十八年の系図は、天和三年（一六八三）の写し〔中世日朝関係と大内氏〕二二一〜二二二頁。その他には貞享二年（一六八五）に写した文明十八年（一四八六）の大内家譜『山口市史料編 大内文化』七〜九頁に載せている。
- (3) 鳥居清「吉田文庫の兼右自筆本に就いて」(一)〔天理図書館報ビブリア〕25・一九六三年、二七〜三〇頁。
- (4) 山田貴司「中世後期地域権力における武士の神格化―大内教弘の神格化と「大明神」号の獲得―」『年報中世史研究』33（二〇〇八年）に詳しい。
- (5) 投稿後、伊藤聡「天文年間における吉田兼右の山口下向をめぐる」〔文学〕一三五、二〇二二年の注(17)でこの系図が翻刻・引用されたが、この系図に関して特に詳しい分析はなされていない。

(6) 香川正矩「陰徳太平記」巻第六「大内先祖之事」(国書刊行会) 一五三頁。

(7) 川副博「大内盛見の実名印章戦跡及墓塔に就いて」『山口県地方史研究』14号(一九六五年・十一月)と「再び大内盛見の実名云々の愚稿に關連して」『山口県史研究』19号(一九六八年・六月)。米原正義『大内義隆』(人物往来社、一九六七年)三七頁と松岡久人『大内義弘』(人物往来社、一九六六年)八頁。

(8) 岩井共二「山口市万福寺地藏菩薩像について」『山口県立美術館研究紀要』一(一九九六年)はこの木造について分析した。また、万福寺の伝説については『防長寺社由来』第三卷五二三〜五二四頁、『大内文化と北九州』(いのちのたび博物館、二〇二二年)九二頁参照。

(9) 盛綱は他の系図では「盛綱」と同一人物である。兼右の系図では彼の父は成房だが、他に存在する系図では成房を盛房としている。『山口市史 史料編 大内文化』一七頁。

内閣文庫の系図纂要も同じく盛房としている。三六頁。盛綱(盛綱)は成房(盛房)の四男か六男。毛利家文庫では一七頁では四男、二〇頁では六男としている。内閣文庫の系図纂要でも盛綱を盛房の子としている。

(10) 毛利家文庫の大内系図二〇頁

(11) 近藤清石『大内氏実録』では持盛を大内氏の家督として認めている。五一〜五二頁。

(12) 毛利家文庫の大内系図は『山口市史 史料編 大内文

化』に掲載されている。持盛の死は二九頁。また、『看聞御記』は『山口県史 史料編 中世1』一二五頁。

(13) 『山口市史 史料編 大内文化』二九頁。

(14) 『山口県史 史料編 中世1』一六七頁。

(15) 『山口市史 史料編 大内文化』八頁。大内氏没後に書かれた系図のなかで、私が一番正確と考えている毛利家文庫の大内系図にも、教祐は戦死したと書かれているが、その時期は不明。『山口市史 史料編 大内文化』二九頁。

(16) しかし、この人達は貞享二年(一六八五)に写した文明十八年の大内家譜に記されている。『山口市史 史料編 大内文化』八頁

(17) 『山口市史 史料編 大内文化』八頁

(18) 『満濟准后日記』『山口県史 史料編 中世1』一一四〜一一五頁

(19) 『醍醐寺文書十二』二六四三号十月十四日智得書状 一一二頁の教祐の戦いに詳しい。

また、彼が死んだ西郷の合戦が永享八年であったことは、二六一〇号十月七日智得書状九六頁。

(20) 『福岡市史 資料編 中世1』文明二年十二月廿三日麻生全教(弘家)置文写五四七頁。

麻生氏豎系図五六八頁と『門司文書』四一頁。(アメリカボージェン大学歴史学部アジア研究所教授)